

# Eureka VI

六年制通信 No. 31 平成31年2月1日(金)号

## 理想郷は存在しない

若い時は軋轢の時代です。自分以外の価値観を持つ人々との出会いの時期と言った方がいいですかね。自分が正しいと思っても、そうは思わない人がある。自分が面白いと思っても、それをバカじゃないかと感じる人がある。友だちなのに怒るポイントが全く分からない子がいる。無口な子もいればおしゃべりな子もいる。真面目に掃除をする生徒の横で平気でサボるやつがいる。勉強も運動もできて自信満々の子がいれば、引っ込み思案で何にも自信の持てない子もいる。どうにも気に入らないやつがいる。大好きな人もいる。いつも明るい子がいれば、被害妄想じゃないかと思えるくらいネガティブな子もいる。

実に人は様々で、学校の中で友だちや先生を観察していると、自分と同じ人間などいないのだと気づくわけですね。しかも、これからどれほどの人と出会ったとしても、きっと同じ感想を持つことになるのです。自分はただ一人しかいないと。

自分の感性と全く同じものを持っている人はいない。ですからそういう、少しあるいは大きく自分と異なる人々の中で生きていかななくてはならないということ、私たちは学校生活を通して「学ぶ」のです。となると、自分から見て理解できない子が、つまり首をかしげてしまう言動をする子が近くにいる方が深く人生を学べるということですね。英語のことわざに **It takes all sorts to make a world.** というのがあります。「世の中を作るにはあらゆる種類が必要だ」という意味です。いろいろな人がいて世の中が成り立っている、そういった方がわかりやすいかな。 **So many men, so many minds.** これは「十人十色」に相当するのですが、同じような意味です。人と人との軋轢に苦しむ人は、このことをよく理解することです。

私はよく、自分にとってのパラダイスやユートピアを集団の中で作ることはできないと言ってきました。ちなみに **paradise** は紀元前5世紀にはペルシアの「果樹園」のことでしたが、七十人訳聖書以来「エデンの園」「楽園」の意味になりました。語源辞典は便利ですね。もう一つ「理想郷」の意味で用いられている **Utopia** はトマス・モアの同名小説が元ですが、これはすでに名前からして作者のブラックユーモアなんですよ。古典ギリシア語のウートポスが語源で、ウーは **no**、トポスは **place**、つまり **nowhere** に当たる語なのですから、元々どこにもないわけです。それが理想郷・ユートピアという語の成り立ちです。したがって、探してもムダです。

軋轢に負けそうなとき、自分にとって不都合な個人を自分の所属する集団から排除したくなることがあります。しかし、そういう「排除したくなる人」はこれからの人

生でいくらでも現われてきます。向こうもそう思っているかもしれないしね。そして自分にとって腹立たしい人であっても、世の中を作るには様々な人が必要なのだということを忘れてはいけません。排除したくなる気持ちは、世の中に対して傲慢なのかもしれません。私はそう思うようにしています。

明治に始まった学校教育は、一日も早く西洋に追いつかなくてはならなかった当時の事情を色濃く反映しています。全国から集まった秀才たちは、高級官僚（あるいは大学の先生も入るかな）になるべく訓練された、おおざっぱに言えばそういうことです。そこには「世の中を作るには様々な人が必要なのだ」という発想はありません。しかし今は、いい意味で様々な教育が可能となっているはずです。私立学校にはもっと自由な教育があつていいと私は考えていますが…。

とにかく自分と違う個性を認め合うこと、それは将来に対する志向というものが人によってさまざまにあるということと、それなら自分なりの（自分だけの）将来像を描かなければならないということ、考えてみれば当たり前のことなのですが、そういうことを大切にしてください。

理想郷はありません。軋轢のない人間関係もないと私は思っています。しかしそんな中でも友情を育みたいのなら、難しいことですが「自分はどう変わればいいのか」という視点が大切です。自分の意志でできることは自分が変わることでいいからね。

#### 今週のおすすめ

・司馬遼太郎 『花神』(上)(中)(下) (新潮文庫)

三重高校の修学旅行先に鹿児島県の知覧を選んだのは、もう10年以上前になりますか。その数年前に特攻平和会館を訪れ衝撃を受けて以来、高校生にもあの遺書を読ませたいと強く思うようになったからでした。それ以前、私は靖国神社には何度か足を運びましたが、遊就館に入ったことはありませんでした。知覧を訪れるようになってから東京に行くことがあれば立ち寄るようになりました。その靖国の参道に大村益次郎の像がありますが、『花神』の主人公がこの人です。村田蔵六として大阪の適塾で学んだ軍事の天才です。福沢諭吉と同時期の人ですが、双方が嫌っています。面白いですね。大村益次郎と改名ののち、戊辰戦争の戦略を立て勝利に導きます。本人は前線には出ません。好物の豆腐を食べながら、もう勝つに決まっているとうそぶいていたそう。最後は暗殺されます。シーボルトの娘で日本で最初の女医さんとなった楠本イネさんに看取られたということです。

大河ドラマでは中村梅之助さんの名演技が光っていました。必要以上のことは言わない、人づき合いは苦手、全く空気を読まない発言…。あの時代が求めなかったら、ただの変わり者の嫌われ者だったかもしれません。

ちなみに花神とは、花咲翁さんのこと。司馬さんはどういうつもりでこのタイトルをつけたのか、読後に考えてみるのもいいでしょう。

BGMは 中山千夏 の あなたの心に でした…。

私の推薦図書を読んでもらっている生徒がいると聞きました。ありがとう。励みになります。